

第124回 日文研フォーラム



# 鬼のいる光景

— 絵巻『長谷雄草紙』を読む

Demons Once Were Real

— A Reading of “The Tale of Lord Haseo” Scroll



楊 暁 捷

X. Jie YANG

---

国際日本文化研究センター





日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄



● テーマ ●

# 鬼のいる光景

— 絵巻『長谷雄草紙』を読む

Demons Once Were Real

— A Reading of "The Tale of Lord Haseo" Scroll

● 発表者 ●

楊 曉 捷

X. Jie YANG

カナダ・カルガリー大学 ドイツ・ロシア・東アジア研究学部準教授  
Associate Professor, Germanic, Slavic and East Asian Studies, University of Calgary

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor, International Research Center for Japanese Studies



1999年12月14日（火）

## 発表者紹介

楊 曉捷

X. Jie YANG

カナダ・カルガリー大学 ドイツ・ロシア・東アジア研究学部準教授

Associate Professor, Germanic, Slavic and East Asian Studies,

University of Calgary

国際日本文化研究センター客員助教授

Visiting Associate Professor,

International Research Center for Japanese Studies

1982年2月 中国・北京大学東方言語文学学部卒業

1988年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程修了

1989年11月 京都大学文学博士

1990年9月 カナダ・トロント大学東方研究学部、非常勤講師

1991年7月 カナダ・カルガリー大学 ドイツ・ロシア・東アジア研究学部  
助教授

1997年7月 同 準教授

1999年5月～2000年4月 国際日本文化研究センター客員助教授

- ・「源平盛衰記における中国故事説話についての研究」『国語国文』、1986年10月、27-51頁。
- ・「杉山山中の物語—源平盛衰記における中国故事説話の方法」『国語国文』、1987年12月、1-18頁。
- ・「談絵巻」『世界美術』、人民出版社、1989年1月、26-29頁。
- ・「孝道東漸小考」『日本学』、北京大学出版社、1989年、157-168頁。
- ・「Ippen at Kumano: His Buddhist Teaching and His experience with Japanese Kami」『Journal of Buddhist and Tibetan Studies』、巻一、1994年、31-64頁。
- ・「中国故事の終極」『仏教文学』、1997年3月、64-82頁。
- ・CD-ROM『kanaCLASSIC™—電子版変体仮名の手引き』、カルガリー大学、コロンビア大学出版社、勉強出版、1988年3月。
- ・「世界から見た日本文学」（鼎談：李御寧、小森陽一、楊曉捷）『すばる』、1998年5月、238-253頁。

- 一 楼上の対局
- 二 双六に生きる人々
- 三 ハイカラな賭博
- 四 禁止の対象としての歴史
- 五 双六に賭ける
- 六 見立ての果て
- 七 鬼は顔を見せる

## 一 楼上の対局

### 対局の顛末

平安朝もその前期のころ、いまからは遙か千年も昔に遡る。ある日の夕暮れ、百の芸に精通するとの誉れ高き長谷雄卿のところに、見るからに賢そうな一人の男が忽然と現われて、双六の対局を申し入れる。絵巻『長谷雄草紙』が伝えようとしている、不思議で愉快極まりないドラマは、こうして幕を開いた。

賑やかな町角をぐり抜け、長谷雄とこの男の二人は、対局の場所である朱雀門の下にやってくる。

絵巻は、これまで一段の詞書をもって物語の主人公を紹介し、長い絵をもって隨身に囲まれた長谷雄とその邸宅、さまざまな職業の人間で生氣あふれる町中をのんびりと描いた。ここにきて、ストーリーはようやく最初の山場に差し掛かる。絵巻は一転して簡潔でコミカルな表現に切り替えた。行き届いた視線と巧妙な構図、そして緊迫したリズムをもって、この奇妙な対局とその結果をあっさりと表現した。

絵巻の二段目において、ストーリーはつぎのようなプロットをたどる。

- ◇長谷雄は、男の手助けにより、門の上に易々と登ってしまう。
  - ◇二人は対局の道具を取り出す。
  - ◇互いに賭け物を決め、男は美女、長谷雄は財産を賭ける。
  - ◇男は、対局が不利になるにつれ、鬼という本来の顔を見せる。
  - ◇長谷雄は動じずに対局を続け、勝つ。
  - ◇男は賭け物の手渡しを後日と約束して、長谷雄を地面に降ろす。
- つぎはこの段の詞書である。読みやすくするために、句点を付け、前記のプロット

トごとに改行を施した。

「この門の上へ登りぬべく」と言ふ。如何にも登りぬべくも覚えねど、男の助けにて、易く登りぬ。

即ち、半・丁と取り向かへて、

「賭物には何をかし侍べき」「我負け奉りなば、君の御心に、見目も姿も、心ばへも、足らぬ所なく思さむ様ならむ女を奉るべし。君負け給なば如何に」と言へば、「我は身に持ちと持ちたらむ宝を、さながら奉るべし」と言へば、「然るべし」とて

打ちける程に、中納言ただ勝ちに勝ちければ、男しばしこそ世の常の人の姿にてありけれ。負くるに従ひて、賽を掻き、心を碎きける程に、元の姿現はれて、恐ろしげなる鬼の貌になりにけり。

恐ろしとは思ひけれども、「さもあれ、勝ちだ

絵一 朱雀門を指差す男と長谷雄



にしなければ、彼は鼠にてこそあらめ」と念じて打ちける程に、遂に中納言勝ち果てにけり。

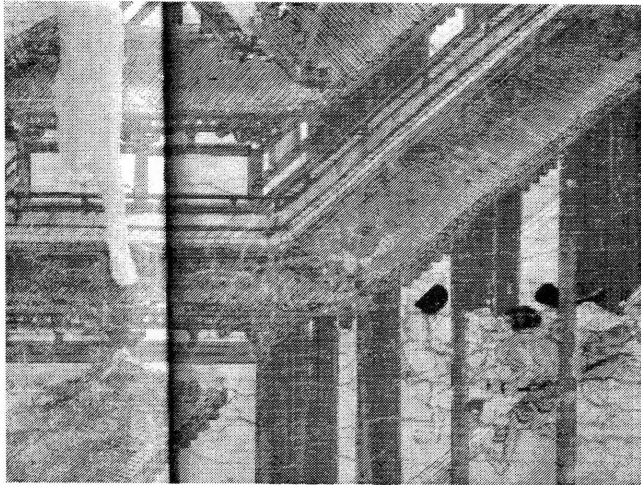
その時、またありつる男の貌になりて、「今は申に及ばず。さりともしこそ思ひ侍つれ。辛くも負け奉りぬる物かな。しかじかその日弁へ侍べし」と言ひて、元の如く降ろしてけり。

### 絵のなかの時間

この対局の様子を描いた絵をじっくりと眺めてみよう。

この段の絵は、前後二つの部分に分かれ、長谷雄と男はそれぞれ二回ずつ登場した。絵の前半は門の下に來た二人の様子であり、男は門の上を対局の場だとして、左手を高く指差して、

絵二 応天門炎上の際の朱雀門（『伴大納言絵詞』より）

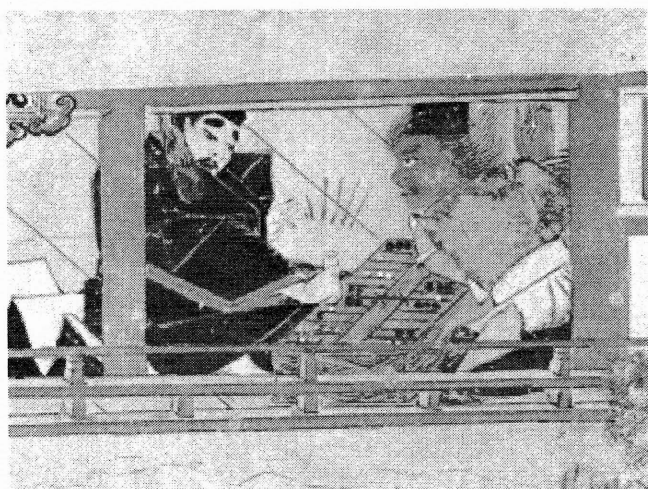


熱心に登るようと長谷雄



を説得する（絵一）。朱雀門は、わずかにその石壇と柱の下部を覗かせただけ、あまりにも巨大で、門の全容を画面にあらわすことはない（絵二）。絵は左へと進み、二人の対局の様子がそこにある。画面は、門の上とほぼ同じ高さの位置にある視点からこの対局を捉える。巨大な門という設定はここでも強調され、双六の盤を挟んで熱闘を繰り広げた二人の構図は、わずかに画面の左上の小さな一隅しか占めない。対局はまさに勝負の行方が分かれる中盤にさしかかるものだと見え、二人とも全神経を集中させて、一瞬の気持ちの緩みも見せない（絵三）。

絵師の描き上げた構図は、じつに巧妙なもので、このわずかな空間において、緊迫した時間の移り変わりと事態の展開を見事に表現した。



絵三 長谷雄と男との対局

男は前の画面と同じ服を着て、頭には同じ烏帽子を被りながら、顔は鬼に変容した。鬼の目は大きく見張り、対座する長谷雄を見つめる。対する長谷雄は、視線を逸らして、目を下のほうに向ける。鬼の視線の延長にあった長谷雄のこの姿は、まずは鬼を恐れての様子を為して、これは詞書にある「恐ろしげなる鬼」との表現に対応する。しかしながら長谷雄の姿をじっくり見れば、かれは上半身をきっぱりと伸ばし、裾をきちんと整えて、手は筒をしっかりと握る。全身は少しの乱れも見せない。そしてもっとはっきりしているのは、筒の上に添えられた何本かの縦の線である。このようなあきらかに説明っぽい描きかたによって、絵師はまさに勝ちの鍵となる賽をこれから振り出す、あるいはそれをだしてから筒を持ち上げるといふ、物理的にも、または精神的にも力強い動きを表現した。このような目で再び長谷雄の顔を見れば、それはまったく鬼を恐れたものではなく、むしろ鬼の視線をもつとしない、余裕のある表情であった。これに対して、対局の劣勢に立った鬼はむしろ逆に身を取り乱した格好になってしまい、頭は盤の向こう側まで乗り出す。そして何かの祈りのポーズだろうか、それともこの鬼ならではの一所懸命のときのしぐさなのだろうか、鬼は両手を右側に高々と上げている。

同じ一枚の絵において、長谷雄の表情からは鬼への恐怖と勝利への余裕、そして鬼の姿勢からは人間への脅威と対局への不安という、互いに両立しないものを読み取ることは、たしかに絵の鑑賞者の想像に委ねるほかはなからう。しかしながら、この絵のなかには、このような鑑賞に仕向けるはつきりした意図的な仕掛けが隠されている。

絵をよく見ていれば、鬼の両手の中には賽が握られていることに気がつく。この描写は筒を盤に置く、あるいは持ち上げるという長谷雄の動作とは明らかに矛盾する。同じ瞬間において、賽が対局する二人の手元にあるはずがない。したがって、この一枚の絵の中には、明らかに二つの、あるいはそれ以上の時間が流れている。

絵師は、まるで現代の映画にみる「フラッシュ・バック」の手法をとくに心得たがごとく、時間的に異なる状況を一つの画面に収め、いくつかの瞬間を注意深く切り取り、それを巧妙に一つの画面に寄せ集めてしまう。絵を鑑賞する人は、これに刺激され、無限な想像を駆らせてこの対局の図を眺めたのだろう。

## 絵の物語・詞書の物語

ここに絵と詞書という二つの表現形態がもつ内容の差異を考えてみる。詞書と絵とは、ともに同じストーリーのプロットを表現し、例えば長谷雄を門の上へ案内すること、鬼が賽を搔くことなど、両者は互いに丁寧に応じ合っている。だが、同時に詞書と絵との両方の表現を丹念に読み比べれば、それぞれが独特の内容を語っている部分があるのに気付く。

絵において朱雀門の上は、ゆったりとしたスペースをもつ空間である。しかも門の全容を覗かせない石壇、木の天辺と同じ高さにある欄干という描き方によって、ここは遥か地面から離れ、普通の生活から遮断された密室だということが強く表現されている。ここには普通の人間の力をもつだけでは登り得ず、世の中の視線が届かないところである。ここに居て、対局の二人はりっぱな双六の盤を挟んで対座する。双六の道具として、筒、賽、駒と一つひとつ丁寧に描かれただけではなく、盤の上での駒の進みぐあいも表現された。双六の対局を熟知する人にとっては、このような駒の置き方によって、激戦の様子が容易に想像され、対局の展開を振り返ったり、勝負の行方を予想したりして、この絵を楽しめることであろう。さらに、対戦する一人は、鬼の顔を見せている。この絵巻において、鑑

賞者はここに男の正体が鬼だということを知り、はじめて鬼として描かれた姿を目にすることになる。ここにみる鬼の顔は、たとえば地獄絵などにくりかえし描かれたあの典型的な顔であり、だれが見てもすぐ鬼だと判断のつくものである。しかしながら、烏帽子を被る鬼、双六の盤のまゑに座って賽を手に握る鬼、そして人間に負けて無念に体を乗り出す鬼、という姿などおそろくここでしか見ることができない。これらのすべては、どれも文字や言葉によっては簡単に表現しきれない、あるいは現実的に表現不可能なものばかりである。

一方では、詞書には絵によって表現していない、あるいは表現できないものも認められる。一番明らかなものは、対局する二人が交わした会話の数々である。ここに賭け物についての話しあいや、そして対局の結果が分かったうえで、男が申し入れた新たな約束が記されている。一方では、鬼の力を借りて長谷雄が門に登ったこと、降りたことも、ともに興味ある絵になるが、残念ながらすべては表現されていない。

同じストーリーの展開について、詞書は文字をもって時間的に繰り広げられるもの、一つの過程を踏んで移り変わってゆくものを述べ、絵は一つの、あるいは複数の瞬間だけを捉え、細部の様子を丁寧に描き出すという方法でそれを表現す

る。文字と絵という二つの異なる表現形態は、互いに他の一方を補う形で交差し、一つの協奏を成してストーリー全体を豊かなものにした。

## 双六が語る

長谷雄と鬼との双六の対局は、単純なプロットのように見える。画面に描かれたアイテムの数々も、一見自明で、分かりきったものだと感じさせる。しかしながら、はたしてその通りだろうか。時代の移り変わるなか、詞書を読み、絵を眺める人々の意識には、少なからず変化が起こったはずである。ストーリーに登場し、絵に描かれたアイテムは、昔の生活において、鑑賞者にとって今日とはまったく異なる意味とイメージを訴えていたに違いない。

ここでは、焦点を対局の対象である双六に絞って、これを取り上げる。当時の鑑賞者の意識のなかでは、この双六というものは、はたしてどのような位置を占め、長谷雄と鬼との葛藤において、これはどのような役割を果たしたのだろうか。社会生活のなかにある双六のありかたというテーマに一步踏み入れれば、そこには想像を越える膨大な世界があった。

双六ははっきりした意思をもって語り続けてきたものを、つぎにいくつかの角

度から觀察を試みたい。

## 二 双六に生きる人々

### 盤双六と紙双六

今日の生活にも「双六」という言葉がある。これは一つの楽しい遊戯として、お正月などの場ではいままなお一部で盛んに行われている。ところでこの絵巻に登場したのは、それとはまったく別個のものだ。紙に描かれた盤に、対局する人々はそれぞれ一個ずつの駒を持ち、賽の目ごとにこれを進ませるといふ現在楽しまれている双六のことを「紙双六」と呼び、対して長谷雄と鬼が対局したものを「盤双六」あるいは単に「双六」と呼んで区別されている。紙双六が現われたのは江戸時代に入ってからのことであり、一方の盤双六は、それまでに遙か長い歴史をもっていた。因みに、形も遊び方もおよそ縁のないこの二つの遊戯はどうして同じ名前をもつように至ったのかは、諸説があつて、いまだ明晰な答えを見ない（増川宏一『すいろうくⅡ』）。

双六は、普通木製の盤を用いる。盤には、横に十二の升目が上下に二列並び、対局する二人はそこに白黒それぞれ十五の駒を置く。対局者は二個の賽を振って数字（二つの目の組合せ）を出し、それに従って駒を反対側に進め、先にすべての駒を進め終えた者が勝ちとなる。賽の偶然性に加えて、駒の進め方にもきめ細かなルールがあり、それによって相手側の駒を遮ったり、自分の他の駒の進め方を有利にしたりするようにし、対局の経過は、変化の富むものだった。

### 熱狂的な受け入れ方

双六は、平安から中世の時代にかけて、熱狂的な支持を得て、あらゆる階層の人々に愛着された。

絵巻『鳥獣人物戯画』丙巻には、多くの人々が双六の対局を楽しむシーンを伝えている（絵四）。一つの盤を囲んで、人々は地面に直に座り、すべての注意を賽の振り方や駒の動きに集中させる。傍には壺が置かれ、中には酒でも入っているのだろう。観戦する人々は、対局する二人にも負けないぐらい真剣な顔になり、指を折って駒を計算したり、あるいは頭を掻いて対局の行方を不安げに見つめたりして、騒がしい会話まで聞こえてきそうな気がする。輪の中心にいる対局の二



人はまるで対照的だ。烏帽子を被っているほうは明らかに有利な立場に立っており、相手をあざ笑うかのような顔をして、筒を手をしている。対して向かって座っている人は明らかに苦戦を強いられ、烏帽子から禪まで取られて、言葉通り身に一糸も纏わない格好になった。もともとその目で見れば、勝っている人も、片肌を脱いでいる格好だから、けっして楽勝ということではなかった。この画面を眺めて、中世に謡われたつぎのような歌謡のせりふが聞こえてくる。

正月がをじやれば玉打ふ羽つかう、かるた  
将棋双六。重か半もよい石おもふ人にはひ  
かてみせばやあねはの松の一えたしほ、  
『狂言歌謡』一〇七番)

やんれ打てやうて、<sup>つづみ</sup>太鼓<sup>たいこ</sup>鞆<sup>かっこ</sup>鼓手<sup>びやうし</sup>拍子<sup>てんぱ</sup>に、  
基<sup>びやくしやう</sup>雙六<sup>むしろう</sup>におん百姓、いよ蓆<sup>てんぱ</sup>ばたに田畑、



絵四  
双六に熱中する人々『鳥獣人物戯画』  
丙巻より)

よざが米こめを搗杵かうきね、(『松の葉』第二卷「木やり」)

熱狂は民衆だけではなく、双六は、さらに王朝の宮廷の中にも入り、公卿貴族、そしてその頂点にいる天皇や院の好物になった。平安末期の、院による伝説的な政治支配を築きあげた白河院は、つぎのような名言を残して、後世の言い沙汰になった。

賀茂河の水、雙六の賽、山法師、是ぞわが心になはぬもの (『平家物語』「願立」、なお表現のやや異なるものは『太平記』「比叡山開聞記」にも記される)

この短い発言は、武力組織と化しつつ、政治的なコントロールが利かなくなる比叡山の僧侶という集団への非難であり、権力支配者としての地位を守ろうとする白河院一流の野心をありありと伝えている。白河院の言葉は、いきいきとして分かりやすい。河の流れと並べて双六の賽を引き出して、人生の感慨をきわめて自然に述べるところに、双六のある日々を送れる様子が目に浮かんでくる。

## 双六を職業とする

白河院の感慨はあくまでも比喩的な言い方なのは自明なことだ。さきに簡単に

述べた双六の概要が示しているように、双六の対局は、賽の目さえ良ければ勝つという結果になるとは限らない。与えられている目をいかに計算深く応用し、相手の予想がつかない結果を引き出すかには、双六をうつ人の本領が問われる。しかしながら、もっと上等な技を身につけていければ、賽の目さえ意のままに出せる。双六は、奥が深い。

このように双六が、一つの遊戯として人々を惹き付け、夢中にさせてしまうということは、今日のわれわれにもおよその想像がつく。だが、現代の人々には理解に苦しむことはあった。平安から中世にかけては、双六のプロ、すなわちこれをプレーすることを職業とする人間が存在していたのである。

後白河院の撰だと伝えられ、平安後期の今様とその周辺の歌謡を集成した『梁塵秘抄』という作品がある。これの巻二に、ある老女の口を借りて、彼女の二人の子供の生き様を唄いあげている。老女の娘は、母の職業を受け継いで巫女となり、一方の男の子は、早く「宇佐大宮司」に奉仕する早船の舟子として日を暮らし、やがて変身する。

我が子は二十に成りぬらん、博打してこそ歩くなれ、  
国々の博党ばくたうにさすがに  
子なれば憎か無し、負かいたまふな王子の住吉西の宮、

この老女の息子と同じように諸国を転々と歩きまわり、博打・双六をもって生業とする人々の姿は、絵資料に確認することができ。その好例は、多くの伝写本をもつ「職人歌合」である。なかの一例を「東北院職人歌合五番本、色紙形貼交屏風」にみる絵を紹介する（絵五）。博打を職業とする男の前には、大きく描かれた双六の盤や駒、そして筒が置かれ、男自身は、ほとんど裸の格好で描かれている。博打を職業とする男も、けっきょくのところは、やはり失意と惨敗が繰り返す日常だったのだろうか。興味深いことに、「職人歌合」の成立の時期が早いとされる五番歌合においては、博打は巫女と番をし、つぎの時期に成立したとされる十二番歌合には、博打は舟人と番するようになる。両方どちらも『梁塵秘抄』に虚構された老女の子供たちの生きた空間と不思議にも共通している。

絵五 巫と番する博打（「東北院職人歌合五番本、色紙形貼交屏風」より）



双六を職業とする人間の存在とかれらの活躍は、やがて新たなヒーローの伝説を作り出す。そこには、同じような人々の間でしか通用しない言葉があり、生活の理念があり、生きる文化があった。双六の世界はさらに広がる。

## 傳治という人物

ここにもう一人の双六を職業とする男のスケッチがある。かれの名は傳治と言う。もちろん虚構された人物である。『新猿樂記』（十一世紀に成立）には、「太夫君の夫」として、この博打・双六の名人の技、そしてその人柄を鮮やかに活写した。原文は漢文で、ここでは川口久雄氏の現代語訳より引用する。

また太夫の君の夫は、名高いばかり打ちである。賽を振り出す竹筒のあやとりぐあいは傍輩たちに抜きんでいて、賽の目を意のままに出すことができる。双六を打つ時には、十分にことばを尽して呪文を唱え、人の意表をつくる。双六の打ちかたは、なみなみでない。たとえば、五四の尚利目、四三の小切目、錐微、一六難の呉流し、叩子、平賽、要筒、金頭、定筒、入破、乗居、摘垂、品態、賽論といった打ちかたで、これらは有名な宴丸道弘よりも、いちだんとまさっている。すなわち、この太君の夫は、四三一六の名人の豊藤

太、五四街四の名人の竹藤極の子孫であり、字は尾藤太、名は傳治である。彼の目は細く、鼻は平らでべちゃんこ、まるで桃やすももの核のようで醜い。しかも彼には、一に、心のおうへいさ、二に、金銭をたくさん所持していること、三に、賭けぐあいのおまさ、四に、思い入れを強くし氣性を丈夫にすること、五に、あまりに負けたときは無理を言つて力のあるのを誇示すること、六に、口論して言いまくり相手から奪い取ること、七に、人の目をくらしぬくこと、八に、負けたときは相手を殺してもかまわないと思う。こういった強引な氣性が備わつていて、ばくち打ちとしての資質に欠ける所がない。(東洋文庫『新猿樂記』)

この文章には、いくら言葉を平明な現代語に書きなおしてみても、今日の読者には意味が解しがたい表現がある。その一番の理由はこれによって伝えようとする内容それ自身にある。双六の打ち方として挙げられている「五四の尚利目」以下「品態」、「賽論」にかけての用語は、当時の文献からさらに何例でも用例を見つけ出すことが可能であろうが、それが実際に語ろうとする中味に近づくことはなんとも難かしい。このような表現は、同じ生活体験を持たない人間の接近を拒んでいるように見える。

## 双六男の氣質

しかしながら、双六男傳治の性格を伝えた最後の段落は、世間の目からの視線を捉えたものだったからだろうか、博打打ちの人間像を伝える名文句としてかなりの生命力をもった。この段落の原文はかなり簡潔なものだった。

一心、二物、三手四勢、五力六論、七盗八害。

これと同文あるいはかなり近似した記述は、『伊呂波字類抄』、『口遊』などに見られる。いうまでもなく、さきの川口氏訳は、翻訳者個人の想像によって言葉を補ったのではなく、同じ記述については、歴史の中で長くこのような理解が続けられてきた。近世に入ってからの一例を挙げる。

さればくちをうつには、一心、二物、三上、四性、五力、六論、七盗、八害とて、八つの物そろはねばかたぬと云。まづ一心とは、負けても大事なしと、ここをおほへいにもつ事。二物とは、錢金をたくさんにもちて、一歩めに金子一兩まけたらば二番めには二兩たててうつ、二十兩まけたらば、四十兩たててうつ、かくのごとくすれば、一度は何としてもかつ事あるゆへに、つるにはかちと成。三上とは、上手がよし、へたなればかつ事なし。四性とは、おもひ入のつよきがよし、思ひ入がよはければ見おとしもあり、又ねぶ

たくもなりて、ぬすまるをもしらず。五力とは、あまりにまけたる時には、むりひがごとを云かけて、うばいあふ時もあり、力よはくてかなふまじ、六論とは、口をきき口論をして云まくり、むかふのものに氣をせかせてはきはひをとる、七盗とは、人の目をくらまし、ぬすみをせねばかたれぬぞ。八害とは、右の一心、二物、三上、四性、五力、六論、七盗の七つを以もまけたる時は、そのあひてをきりころして、とるより外の事なし。『可笑記』五、

寛永十三年（一六三六）刊

すべての手を尽しても勝てなければ、最後は相手の財産を盗み、はては殺してしまふ。これを一人の人間の生き方としてならさておくとして、双六を職業とするすべての人間がもつべき性格だと信じられていたことは、今日のわれわれには到底理解が出来ない。

双六男傳治という男の武勇伝はついに聞くことはない。しかしながら、喧伝されたかれの人格をそっくりそのまま実践した一人の男のことが知られている。かれは双六を打つ武者であった。ある対局のおり、口争いからついに武力行使とエスカレートし、そして刀を抜き、殺すと脅かして相手の髻を切り落とす。そこで主人が殺されたとばかり思い込んだ下女たちは、奮起して力を合わせ、武者を倒



してかれを殺してしまう。相手を殺せず逆に女性たちに殺されてしまったこの双六の名人は、長く笑い沙汰になってしまった（『今昔物語』巻二十六「鎮西人、打双六擬殺敵被打殺下女等語」）。

### 社会的な期待を問い求める

双六は特殊な知識や人間離れな技を必要とし、したがってこれをこなした人々はやがて一つの芸能としてこれを伝承する。双六をめぐって特殊な言語と文化が生成し、それはやがて歴史の伝統を新たにし、時代の文化をさらに豊かなものにする。双六に生きる人々は勝負に明け暮れ、やがて社会全体の規範を受けず、これを突き破ろうとする。これらすべては、双六の職人という一つの人間グループが誕生する基盤を作る。そして、そのような人間が実際に現れると、かれらはこのような独特な文化の担い手、創造者となって活躍し、やがてさらなる伝説を作り上げる。

しかしながら、双六を打つことを職業とする一群の人間が存在していたこと自体は、やはり今日のわれわれの常識を超えてしまう。多数の資料を見てきても、つぎのような素朴な疑問はなおたさざるをえない。一体どうしてこのような

「非生産的」な遊戯を職業とすることが可能だったろうか。身を纏う服まで失った博打男に、はたして人々はなにを期待していたのだろうか。

このような質問への答えに、いまだ簡単に辿りつくことはできない。疑問を抱きつつ、つぎのテーマに移りたい。

### 三 ハイカラな賭博

#### 賽の目

双六対局の具体的な内容はあまりにも知られていない。

さきに双六対局の規則をごく簡単に触れた。実際のところ、双六の対局の規則は、いまこのようなごく漠然としたことしか分かっていない。双六の盤や駒、筒といった道具は、実物として確に残っている。しかしながら、対局そのものは、その時その場における一度だけのもので、終わってみれば跡形も残らない。それはまた膨大な回数を重ねた。地域的、時期的、そして人間の集まりによっては、その時その場にしか通用しないルールが用いられたことも簡単に想像できる。か

りにこれらのことを排除して、いわば典型的な対局のルールを再現することさえ、今日になっては至難の業だ。

これに関連して、興味深い研究が行われている。いまここで読んでいる長谷雄と鬼との対局は、途中まで進んだところが絵に描かれて、そして盤や駒の描き方がかなり丁寧だったため、中世初頭までに行われていた対局の実際を推測するのに格好の資料と目されてきた。そこで、増川宏一氏は、これを用いて対局のなかでの駒の動かしかたを実際に推論してみた。しかしながら長谷雄と鬼との両方はどちらが白の駒を取ったかということから確証が得られず、男の体や欄干に隠された盤の隅に置かれた駒の内容を推定するにはさらに四通りの可能性を並べざるをえなかった。そこからの展開は想像の積み重ねになる（『すごろくⅠ』第五章）。同じことを課題として、現在なお行われているバックギャモンのルールを元にして双六の対局を再現することも試みられている（草場純「双六の局面考」『遊戯史研究』6）。このような丁寧な研究により、対局復元の難しさをいっそう思い知らされたのである。

ここではあえて対局の詳細に拘らない立場をとる。そこで、改めて関連の資料を読むと、対局の全容の具体的な解明には繋がらないが、対局の展開を大きく左

右する賽の出し方、その結果については、多くの独特な表現が残されていることに気が付く。同時代の辞書や類書、それから対局のエピソードを伝えた記録には、たとえば「重一」、「重二」、「朱三」、「朱四」といったような用語は頻繁に登場する。双六は二つの賽を用いたので、これらの用語は二つの賽が同じ目を出すのを指すことは、およその想像がつく。そして、このような用語が残されていることから、双六には、二つの賽によって出した数字の加算以外に、目の組合せにはなんらかの意味があり、たとえば一と五という二つの目を出すよりは、二つの三を出したほうがなにか規則上の特権が与えられたことも、推測することができる。

これと同時に、ここに登場した表現はもう一つのことを暗示した。「重一」、「朱三」といったような言葉は、日本語として自然な造語とは考えにくい。そしてその読み方も特殊なのだ。「重五」は「でく」（『下学集』）あるいは「でく」（『平治物語』）と読み、「五四」は「ぐし」と読む（『書言字考節用集』）。明らかに当時の日本語の読み方の規則に合致せず、中国語の発音をそのまま真似たものだと思うられる。

## 双六は海を渡ってくる

双六は、日本在来の遊戲ではなく、古く中国から伝来したものである。

双六を楽しむような記録あるいは伝説は、かなり古いものに遡る。双六をもつて昔の王朝盛事を語り伝えることも多くあった。たとえば、聖武天皇が曲水の宴を催して、詩作のできない賓客にはわざわざ双六の道具や賭けるための錢を与えて遊ばせたといった、いかにも寛大な君主を称える雅やかな伝説が知られている（『墮囊抄』巻第一）。しかしながら、双六を記録するものは、たいてい決まってそれが天竺、そして中国から渡来したことをまず記す。一例としてつぎのような記録が見られる。

夫双六の基は。遠西天の古より。近く東土の今に至。伝て絶ざる玩。様々の品を顕はす。穆王も是を興じつつ。井公とたはぶれ給ひき。されば孟嘗君は。はかりて咎を酬理。犯を幸諭とす。（『宴曲抄』上「双六」）

双六はただの遊びではないことを、この記述は力説する。それは海の向こうから渡来した由緒ある遊戲であり、あの聖主という誉れ高い穆王でさえ、かれの夫人である井公と双六の遊びに明け暮れて、あまりの夢中さゆえに、忠臣の孟嘗君に諫められたぐらいだった。ここに、穆王という名前は、双六に娯楽以上の意味

合いを与えた。

### 楊貴妃の物語

再び双六の用語に戻る。

さきにあげた中国語読みを用いた用語は、そのまま双六を楽しむ人々の会話や記録に用いられただけではなかった。用語自体は伝説となり、中国の宮廷生活などを伝えるものとして、その由来と中味が詮索された。つぎの説話を読んでみよう。

昔は重三、重四と申候けるを、唐の玄宗皇帝と楊貴妃と双六をあそばされ候けるに、皇帝重三の目が御用にて、朕が思ひの如くに下たらば、五位になすべしとて、あそばされけるに、重三の目をり候き。楊貴妃の重四の御用にて、我思のごとくをりたらば、共に五位になすべしとて、あそばされければ、重四の目をり候き。共に五位になせとてなされ候む。五位のしるしには何をかすべき、五位は赤衣をさればとて、重三重四のめに朱をさされてより以来、朱三朱四とこそ呼候へ。『平治物語』『叡山物語の事』より)

これは、信西がいかに豊かな知識の持ち主だったかを伝えるために、かれの口

を借りて述べさせたものである。話の主人公はあの「長恨歌」に詠まれた唐の玄宗皇帝と楊貴妃である。宮廷の奥で行われたささやかな出来事として、双六の対局が伝えられた。対局が大事な局面を迎えて、玄宗皇帝はともに三の目の賽、そして楊貴妃はともに四の目の賽を必要とした。二人の思いはそれぞれ適えられ、やがて約束した通りに、賽に五位という官位を与えた。五位の標識とは赤い服だったので、「朱三」「朱四」の呼び方ができた。いかにも中国王朝の爛熟した文化と、どこことなく退廃した宮廷生活の雰囲気をおぼせる逸話である。

以上の説話は、ここに引用している『平治物語』だけではなく、さらに多数の文献に収録されている。なかでも、中世の辞書である『下学集』（一四四四年成立）となると、「和漢共に此の故事あり」として、日本の一条院にも同じ出来事があったとした。もともと『下学集』は、「朱三」「朱四」という用語を、一回に投げた二つの賽は、三と四の二つの目を出したものだとした（『下学集』下「器具」）。他の記録などに照らし合わせて、この解釈は明らかに正確だとは言えない。『下学集』という辞書の記述の性格を改めて吟味しなければならない。それと同時に、双六の知識への関心の度合いを表わす特殊な事例としても興味深い。知識人を含めて、双六に熱中する人間たちの外に立った人々は、遊戯の詳細については、全体的に

はかなり限られた関心しか示さなかったと言える。

### 物語の出自と変容

「朱三」、「朱四」といった用語を伝えた楊貴妃にまつわる説話は、たしかに中国において成作され、海を渉って日本にもたらされたらしい。さいわいこの説話を記す作品がいまだに存在している。それは、宋の樂史という人が書いたと伝えられる『楊太真外伝』という書物である。この本の下巻に、さきの『平治物語』に見られた説話とほぼ同じ内容が記された。内容上の目立った違いといえば、ここには「朱四」だけで、三の賽のことには触れていなかったこと、「五位」と特に述べないで、「緋の衣」を賜ったと記すに止まったこと、ぐらいである。

注目したいのは、『楊太真外伝』が伝えた双六のストーリーは、楊貴妃にまつわる多数の逸話の一つとして取り扱われた。この説話の直前に記されたのは、同じく「長恨歌」において詠まれた、早馬をもって楊貴妃が好む荔枝を運ばせたという話だった。樂史の描いた世界において、過ぎた時代の、伝説的な存在となる楊貴妃の逸話は、そのまま宮廷生活の華麗優雅な日常を伝えるという側面を持ちながら、好色な暮らしに溺れる皇帝と、成りあがりの美女、そしてかれらの節度を



失った生活への凝視であり、世の無常を嘆くものだった。皇帝の一時的な喜びのために、賽に人間でさえ簡単に期待できないような官禄があたえられるものだと、この説話は明らかに非難のメッセージを含めていた。

いうまでもなく双六の故実となった楊貴妃の説話には、以上のような意味合いがすでに消えうせた。代わりに強く感じさせるのは、用語の中国語の発音だけでは感知しにくくなりがちなのこの舶来の遊戯がもつ外来文化の色合いを強調しようとする知的な意図である。このような思いにより、双六に接する人々にはるか海の向こうの文化伝統に思いを馳せ、中国の宮廷の煌びやかで雅やかな生活を、まるで模擬的に体験するかのような快感を思い出すものであった。

### 「内人双六図」

ここに、古代中国の宮廷において双六が楽しまれた様子を伝える一巻の貴重な巻物がある。唐の周昉の作だとされるもので、「内人双六図」というタイトルをもつ（宋の時代の模本、フリーア美術館蔵）。長い画面には、一人の男性と七人の女性を描かれ、そのほぼ真ん中の位置に、双六の対局に夢中になる二人の貴婦人が向かいあって座っている（絵六）。一人は駒を動かし、もう一人はそれを待ちかね

るかのように、賽を高く持ち上げている。絵は  
繊細な線と丁寧な色をもって、女性たちのふく  
やかな体と優雅な姿勢を的確に伝えている。

絵巻を見慣れてきた目には、この絵に描かれ  
たすべては、まったく新鮮なものばかりである。  
絵にみる人物の容姿、服装の模様、調度の形か  
ら構図の配慮、色彩の選択にいたるまで、その  
どれをとりあげても、異質な文化の表現で  
ある。ここにあるのはたしかに双六の対局なの  
だ。でも、ここに流れている時間も、交差した  
視線も、これまで見てきたものとまったく異な  
るものに見えてならない。

この絵は、昔日本に伝来されることはなかつ  
たと思われる。だが、中国語の呼び方を持って賽の目を言い、由緒ある双六の故  
事を熱心に言い伝える平安・中世の人々が想像した世界を理解するには、ここに  
展開されているビジュアルな描写は大いに示唆に富む。かつて双六に投げられた

絵六 二人の宮女が双六に熱中する（「内人  
双六図」より）



視線には、現在われわれがこの絵を眺めるのに似たようなものがあつたろう。双六に夢中になる人々は、あらゆる伝説や知識の力をもって、この絵に描かれたような時間と空間を具現し、異なる文化のなかに育まれた遊戯を自分の手に入れたかのような精神的な喜びと刺激をつねに感じていたに違いない。

海のむこうにある国の歴史や文化への憧憬は、双六という遊戯にハイカラなイメージを持たせ、一種の文化的な価値を与えたと考えたい。

#### 四 禁止の対象としての歴史

##### 双六は禁止された

異文化の華麗なる輝きをまるで模擬体験させてくれるかのようなイメージは双六の表だとすれば、これに伴う鎮圧と刑罰などの暗黒な一面はその裏だった。これを語らなければ、双六を十分に捉えたとは言えない。

双六はかなり古い記録に遡る。非常に不名誉なことに、双六は禁止の対象として歴史に登場し、その記録の第一ページを残した。

持統三年十二月丙辰、禁斷双六。

これは、『日本書紀』卷三十に記された一行である。持統天皇が即位したのは、七世紀の後期のこと（六八七年）で、白鳳時代の女帝として、持統天皇が成し遂げた最大の政治的な貢献は、いわゆる律令制度の完成であり、大宝律令の施行（七〇一年）は、その存命中のことであった。ただし、この持統年間に行われた双六禁制については、この日付と「双六を禁斷す」という短い文言以外、あとは一切記されていない。この政令が出されるまでの経緯、禁制の理由、実施の規模、その方法など、いまはすべて想像によって補うほかはない。

双六が禁制されるはめになったのは、なによりもその賭博という性格が一番の理由だったろう。短い対局に人々は各自のもつ財産を賭け、そしてその勝負により財産の持ち主が入れ替わる。いうまでもなく普通の社会の秩序に反し、さまざまな争いの引き金になった。『日本書紀』からは数百年も経ってからの歴史を伝えるものには、現代の学者がまとめた『平安遺文』がある。ここに集められた書状や手紙文などには、双六の対局により財産の所有者が変り、よって争論の沙汰となる事件がいくつも伝えられている。財産の内容は馬だったり（三七六、長徳四）、土地だったり（三八三五、承治二、四八一九、仁安二）する。このような形で伝

わった記録以外にも、なお膨大な数に及ぶものが歴史の裏に取り残されたことは、容易に想像がつく。

『平安遺文』は、双六にまつわる人々の生態、言い換えれば、土地財産の争いに至るまでの、賭博の場のありかたとそこに出没する人間の姿を伝えている。記録には、例えばつぎのような記述が繰り返して現われる。

京中奸濫之輩、招類結党、好事双六、似無前誠、(「左京保刀禰請文〇九条家本延喜式卷三十九裏文書」五五四、五五七、など)

ここに見えてくるのは、まともな生業をもつわけではなく、ただ無暗に双六の勝負に明け暮れる人々のことである。しかもかれらは少人数ではなく、同類となる人々が群を成して公然と打ち込むのであり、繰り返し公示される禁制をもともしなかった。正常な秩序にとつては、まさに取り締まるべき存在なのである。

### 懲罰と賞与

双六の禁制は、起こった争論や事件のための単なる解決ではなく、これに熱中する輩と、かれらを取り締まる官吏との二者の間だけの力比べにも止まらなかった。禁制の狙いは、普通の人々の注意を喚起することであり、一人でも多くの人

に双六賭博がもつ罪意識に目覚めさせることは、禁制のよって立つ意図だったはずである。ここに一般の民衆をいかにして双六撲滅というキャンペーンに巻き込むかは、たいへん興味深い課題である。

養老律令（七五七年から施行）が取った双六をする者への懲罰は、あくまでもその財産を取り上げることである。しかしながら、今日の目から眺めて、特異なことに、双六の現場を取り押さえ、そこで徴収した賭け物の財産は、現場発見を手伝った第三者の所有となったのだ。同律令の公的な解釈書である『令義解・捕亡令』には、つぎのような記述が記されている。

凡そ博戯に賭れらむ財、席に在りて有らむ所の物、及び句合、出九して物を  
得て、人の為に糺し告されたらば、其の物は悉くに糺さむ人に賞へ。即ち物  
輸けたる人、及び出九、句合客止せる主人の、能く自首せらば、亦賞ふ例に  
依れ。官司捉へ獲たらば、減半して賞へ。餘は没官せよ。唯し賭して財得た  
らむ者は、自首せば、賞ふ限に在らず。其の物は悉くに没官せよ。（日本思想

#### 大系『律令』

「博戯」の内容については、原文には特別に「双六樗蒲之属」という記述があり、当時では賭博と言えば双六がその代表的なものだったと知る。賭博の場にいる人

間や仕来りについては、「句合」と「出九」との表現も目につく。「句合」とは、人々を対局させること、すなわち賭場を設けて利益を上げようとする人間のことで、今日の表現では「胴元」あるいは「胴親」にあたり、「出九」とは利益を得る行為で、賭博をさせて手数料を取るといったものである。賭けられた財産の九分の一を取るというのが、かつての相場だったろうか。

律令が定めた双六禁制に協力した者たちへの奨励の方法は、じつに大らかで分かりやすい。賭博の証拠が押さえられた場合、犯罪者逮捕に手伝った協力者の関わり方を三通りの状況に想定する。一つは協力者は自分で賭博の人間を搦め、それを官府に連れて行くこと、一つはただの通告者であり、官府の力で賭博者を押さえること、そしてもう一つは通告者は賭博当事者であり、自分の財産を無くしたとの理由でこれを告発することである。奨励の方法は明快だった。押さえた財産は全額あるいは半額をそれぞれ一番目か二番目の状況の通告者に渡し、三番目の場合は、その全額を政府のものとして没収してしまう。

残念ながら、このような法律の実施状況について、今日ほとんど知られていない。このような規定は、どこまで普通の民衆の知ることとして浸透されたのだろうか。どれだけの人間が、これを一財産を儲ける機会だとして、双六賭博

撲滅のために躍起になったのだろうか。長い歴史のペールの彼方に消え去った人間の活劇には、ただ想像を逞しくするばかりである。

## 身体の刑罰

双六禁制の法令は、奈良王朝から下って武士の治世の時代まで、繰り返し発令され、それらの記録を拾い集めれば、長大なリストになってしまふ。そして禁制の手段としての懲罰は時とともにエスカレートし、それはただ単なる賭けられた財産の没収に止まらず、懲罰の対象として、その場においてなにかが賭けられていたかどうかも大事な判断基準にはならなくなった。懲罰はやがて人身への刑罰になり、双六をめぐって血なまぐささまで感じさせる歴史の一頁が残された。

もともと律令のシステムにおいて、身体の刑罰をもって双六をする人間を戒めるような規定があったと思われる。日本の律令の手本となる中国・唐の律令には、「杖一百」を叩くことをもって、双六をする人に処すると定められている（「雜律」）。ただしこの部分にあたる日本の律の条目は現在伝存していないため、この規定の存在を確かめることができない。

律令の時代からは数百年も過ぎた、下って十四世紀の初頭、鎌倉にある武士の



幕府は国の政權を握り、新たな政治的、社会的な秩序を作り上げることになる。その中において、双六への禁制は相変わらず受け継がれ、その処罰の方法もいっとなく厳しいものだった。つぎのような記録が残されている。

#### 博奕の事

侍におきては、斟酌あるべきか。凡下の者に至りては、一二箇度の者は、指切らるるべし。二三箇度に及ぶ者は、伊豆大嶋に遣らるるべき也。（「鎌倉幕府法」追加法、乾元二年へ一三〇三）

興味深いことに、処罰の内容は、犯罪者の社会的な地位によって差が付けられた。「侍」のものは特別に考慮が受けられるが、普通の人間になると、厳しい刑罰が待っている。そして身体に傷害を与えることよりさらに厳しい処罰として流刑があった。

以上のような幕府の法令が発令されるまでには、このような身体への処罰はすでにかなりの間実際に行われていたと思われる。時間はさらに半世紀以上もまえに遡り、鎌倉幕府も初期のころ、京都にいる藤原定家は、かれの日記のなかに、つぎのような出来事の経緯を記した。

近日、前宰相中将信盛卿の家の門並に築垣の辺り、京中の博奕狂者群を成し、

座を儲けて双六の芸を施す。家の内より制すと雖も、敢へて承引せず、家主此の由を河東に触る。武士を遣はし、悉く搦め取る。一人を洩らさず。其の鼻を削り、二の指を斬る。隆親卿の小舎人冠者其の中に在り。惣じて一人を免さずと云々。此の事に於ては若しくは禁ぜらるるか。『訓読明月記』嘉禄

二年（一二二六）二月十四日）

日記の作者である定家は、あくまでも平安的な視線をもって世の中を眺めていたからだろうか、かれの筆によって記された双六に熱中する輩は、まさにさきの『平安遺文』において伝えられてきたものと同じ風体をもつ。かれらは群を成し、そして世の中の決まりをもとめせず、そこにある家の主人の戒めに耳を貸そうともしなかった。ここには世の秩序を維持することを役目とする武士の登場があった。賭博に現を抜かす者どもを一人残らず捕まえ、そして鼻を削り、指を切ってしまう。定家の知り合いに仕える雑用の少年も捕まえられる人間のなかの一人に数えられ、その難を逃れることができなかった。処罰の内容について、原文は「二指」とある。果たして第二の指、または駒を動かす二本の指なのだろうか。

## 処刑の様子を想像する

今日になっては、鼻や指を切り落とす刑罰の様子は、すでに知る術もない。わずかに参考になるのには、絵巻に描かれた後三年の役の戦場に起こった残酷な一つのシーンがある。敵方の城を落とした源義家が兵士に命じて、かれを罵った千任<sup>ちとう</sup>の舌を切る（絵七）。思えば一群をなす双六の輩を処罰するのは、ここの状況よりはいくぶん「平和」なものだったろうか。それにしても、そこから伝わってくる悲鳴叫喚を思い描いて、双六のイメージには、いまひとつまったく異なるものが加えられたことを感じる。

さきに述べてきたように、鎌倉幕府の法令では、双六をする人間への処罰の有無は、その人が占める社会的な地位如何によって定められていた。双六とそれへの処罰を考えるうえで、このことはいかにも象徴的な意味をもつ。ここには、近代とはまった



絵七 千任という武士の舌を切り取る  
〔後三年合戦絵詞〕より

く異なる法の原理が働いている。残酷な刑罰をもって断罪しようとしているのは、同じ行為をする人間の一部に過ぎない。言い換えれば、ここで罪とされたのは、双六という遊戯がもついくつかの側面の一つだった。処罰は社会の秩序を維持するという努力の延長線にあり、双六の反社会性への裁断であった。

双六は、精神的な想像を刺激し、優雅な生活を表現するものであると同時に、社会の秩序に対抗する人々を集めさせる賭博の道具でもあった。時と場の違いにより、そのどちらか一方への人々の感じ方の偏りや寛容も、時代と社会の共通した認識の一つだったと言えよう。

## 五 双六に賭ける

### 二枚の絵

双六は、勝負のある遊戯だ。勝負を争うまでのプロセスは、双六の世界のなかに親身になって入り込まないと分かりきれない。しかしながら、勝負の結果なら、これを実際に体験しないものでも、目に見えてしまう。そして、そのような勝負

をさらに決定的な形にしたのは、勝負に財産を賭けることであり、一席の対局により、他人のものの獲得か自分のものの喪失という結果である。双六にまつわる数々の伝説のなかには、このようなことが特別に喧伝され、強調されてきた。

ここには、非常に対照的な内容をもつ二枚の絵がある。双六に夢中になる人間の、とことんまで貧乏な姿と、このうえなく豊かな生活ぶりがそこに描かれている。

一枚目は、「職人歌合」に収められた博打

打ちの絵である（絵八）。絵師の絶妙な筆遣いにより、落ちぶれた双六男の姿が生き生きと目のまえに踊りだしている。中年の盛りも過ぎたかれは、かつて数々の名対局をもっていたのだろう。しかしながら、いまとなればそれらはすべて過ぎさったものであり、かれに残されたのは賭博の道具一式と折烏帽子一丁のみである。禪まで失ったこの男には、それでも「職人」と呼ばれる資格があるのだろう。

絵八 まっ裸まで負けた博打打ちの姿（『東北院職人歌合絵巻』より）



か。気の毒な気分を通り越して、ただ滑稽で笑いを誘うような格好なのだ。この絵を眺めて、自ずから長谷雄の師である菅原道真が詠んだつぎの句が聞こえてくる。

身を裸にして博奕する者、道路南助と呼べ

り。（『菅家後集』『慰少男少女』）

詩人は「南助」という言葉に注釈を付けて、「南大納言の子、内蔵助、博徒なり。今なほし号けて南助といへり」との解説を残している。

「職人歌合」の絵師は、平均的な職人としての博打の姿よりも、人々に熟知された「南大納言の子」のような人間のイメージを用いてこれを描いたのか、それとも「職人」という人間は、けっきょくのところ、このような博打男が担当したのだろうか。

これに対して、二枚目の絵は、『石山寺縁起』に描かれた双六の対局である（絵九）。これは裕福な家庭において展開された長閑な状況で、



絵九 富をもつ人々の余興だった双六（『石山寺縁起』巻五より）

対局する人々も、これを招待して、楽しませるべく振舞う主人も、溢れる富を身にもっている。対局のすぐそばには、盛大な宴会が終わることなくひき続き、建物の外には、貢うものを運びこむ人間が列を成している。ただし一つだけ明らかなのは、この人々の富は双六の対局によって築きあげたものではないことだった。双六とは、この場においてむしろその富の存在を象徴する光景だった。

双六の対局により、勝つ人もいれば、負ける人もいた。それらの事跡はやがて語り継がれ、記録に残される。対局の勝負により、じつに多様多彩な人間のドラマが出来上がっていた。

## 双六に負ける人、勝つ人

対局の勝負によってもたらされた多くの実話や伝説のなかから、興味深いものを二話紹介しよう。

勝負の伝説のなかでは、負けてすべてを失ったものが圧倒的に多い。その場合、勝負に賭けるものはさまざまで、金銭、土地、家屋、そして妻や子供に及ぶ。さらにこれらのものをなの一つ持っていない人の話もまた語り継がれている。かれらは、現代の人々には思いもよらないものを賭けにしてしまう。

その昔、京都には若い侍がいた。この男は、人の真似をして、流行の清水の千度詣でを二回もやりのけた。そこで、ひよんなことに双六にのめりこみ、あっけなく大きな負けを喫してしまう。差し出すものはいっさいなかったもので、この男は、「只今、貯へタル物トテハ、清水ノ二千度詣タル事ナム有ルヲ、其レヲ渡タサム」といって、その千度詣でという、目に見えないものを差し上げるといふ奇想天外の申し出をする。これを冷かす周りの声をものともしないで、対局の相手はあっさりと受け入れてしまう。そしてその利益というものはものの見事に現れる。さほど日にちが経たないうちに、二千度詣でを手放した男は牢獄に身を繋げられるはめとなり、これを手にした者は、みるみるうちに妻を迎え、富を掴み、そして思わぬ官位にまで恵まれる。なんという明らかな果報なのだろうか。（『今昔物語』巻十六「清水二千度詣男、打入双六語」）

清水詣でに勤しんだ男は、あくまでも信心からではなく、自分のつれづれを慰めるがために修行を重ねたに過ぎない。そのため、これを勝負ごとに賭け、手放してしまうと、男はやがて神仏の加護から見離される運命にあう。あわれな男が失ったのは、目には見えないけれど、金銭や財産よりも遥かに価値あるものだった。平安の民衆の倫理と常識はここにありありと語られている。



負ける人には、負けた悔しさがあれば、勝つ人には勝ったがためのドラマがある。お金を勝ち得たとしても、ただの一財産を作ったというのなら、取り立てて語り伝えるだけの価値もない。語り種になり得たのは、どれも普通では思いつかない生き様だった。

これは同じく京都に住むある年老いた侍の話である。まわりの人々が博打に打ち込むことを目にして、貧乏でなに一つ持っていない自分を嘆いたら、かれの妻は思いのほか理解を示してくれた。並大抵ではないこの女性に、さっそく献身的な働きぶりを見せる。彼女は身に着一枚だけの衣を差し出して、錢五百を借りてきて侍に渡す。わずかな金を手にした男は、ここでは悠長な双六ではなく、即決型の賭博「七半」に挑む。賽の目もろくに分からないまま、手にした錢をすべて賭けたら、一発で倍の一貫を勝ってしまう。さらに続けられ、金は二貫になった。したたかな侍は妻に返す五百文だけをしっかりと懐に入れて、はじめて思う存分に打ち込んだ。その結果はびっくりするものだった。

又をし出したるに、かきおほせて、三貫に成にけり。その、ちは、或は一貫二貫、よき程よき程にをしいだすに、おほやうはかきおほせて、卅餘貫になりけり。

あつという間に、かれは元手の六十倍以上もの大金を手に入れたのである。ここ  
でかれはあっさりと止めてしまう。そして思わぬ金を勝ち得た老侍がつぎに取る  
行動はまさにあつぱれだった。かれは妻に十貫の錢を返し、残りのものを食事を  
賄う手段として、出家してしまう。男の行動は多くの信心深い人々の尊敬を得て、  
喜捨まで集まる。男はまもなく「端座合掌」して、大往生を迎える。（『古今著聞  
集』巻十二「花山院右大臣忠經の侍其妻の懇志に依り七半に勝ちて後出家の事」）  
絶世な好運に見舞われたこの老侍の生き方も、けっきょく信心という一言に尽  
きる。かれは、不思議に流れ込んだ財産を世俗的な使い方に注ぎ込むのではなく、  
代わりに自分の心のなかにずっと抱いていた夢を形にした。男の無上の喜びから、  
人々はまったく別様な世界を覗いたような気分になり、それに精神的な満悦を感  
じつつ、長くこの伝説を語り続けたのだろう。

### 美女を賭ける

長谷雄と鬼との対局では、一方はすべての財産、他方は一人の美女を賭けた。  
美女が双六の勝負に載せられ、話はまったく予断できない展開となった。双六の  
賭け物としての美女は、たしかに突拍子もない話である。だが、歴史伝説のなか

に目を向ければ、おなじく双六の対局に美女を賭け物に登場させる伝説もまた存在していたのである。

伝説的な対局を残したと伝えられる主人公は、さらに地位の貴いもので、光仁天皇とその皇后の井上内親王だった。宮廷の奥にとり行われたこの一幕のドラマは、状況の設定はむしろまえに読んだ楊貴妃の話を思い出させる。ここでは、賭け物は美女と美男となっており、内容のうえではずっとバランスが取れている。

同き寶龜三年の春。当帝は時后井上の後と博奕の御双六を打給とて。戯れ給て御門仰らる、様。我負なば盛らんずる男を後に奉らん。后負給なば色体並無らん女を我に得させしめ給と宣て打給そ程に、御門負させ給にき。后まめやかに時々御門を責申させ給。御門は戯とこそ思食つるに。事にがりて思食煩給。『水鏡』「光仁天皇」

ここの記述によると、変わった賭け物を仕掛けたのは、光仁天皇のほうだった。まるで美女を勝ち取りたい一心からくるがごとく、かれは美男と美女という対局の条件を決め付けた。しかしながら、ここから話の展開は長谷雄たちの対局とはちやうど逆の方向へと向いてしまう。美女を欲しがる光仁天皇はあっけなく対局に負け、美男を差し出さなければならぬはめとなった。しかも井上内親王はこ

れを戲言だとして許してあげることはなく、約束を果たせと攻めまくる。

『水鏡』において、光仁天皇一代の歴史の展開は、この事件をすべての根源として怪しい方向へと傾斜してしまう。顛末を簡単に記すと、つぎの皇位争いの政略を絡ませながら、光仁天皇がやむなく差し出した美男とは、後の桓武天皇になる山部親王である。そして親王と井上内親王との間には目にあまるような関係が結ばれる。やがて井上内親王が殺され、その怨霊は跋扈し、時代は桓武天皇の世に移る。双六対局の一件は、あまりにも荒唐無稽なもので、同じ歴史を記した当時の文献も、または後の時代の記録もどれもこれを伝えていない。ただし、細部が消滅されても、光仁天皇に反逆する井上内親王という構図はいつまでも根強く記憶され、たとえば『平家物語』においては、彼女の名前は朝敵の一人として数えられている（「朝敵揃」）

### 賭博の勝負への視線

双六を一つの賭博の手段として用い、人々はこれにいろいろなものを賭けては、勝ち取ったり負けて失ったりしていた。勝負という目的において、双六だけが道具として選ばれる理由はなかった。現に賭博のため、結果だけ問題にする速決的

なものが喜ばれるものもあれば、逆に悠長なゲームを楽しむ人々もいた。そしてこの極端に異なる二つの傾向はどちらも双六というゲームに関連を持ったことは興味深い。前者の即決のものは、双六の一部分である筒と賽を用いて決めておいた目を争うこととなり、後者の悠長な対局の典型的なものとしては、同じく中国から伝来した盤上ゲームである囲碁があげられる。

賭博の手段である双六の対局には、一局ごとに男たちのドラマがあった。勝負に賭ける財産の内容、数量、金額は、当事者の対局する人々にとって生死にかかわるものであっても、ドラマの完成にはおよそ関係がない。後世の人々が記憶に収め、進んで語り種にした勝負の名場面、心を揺さぶる意外な結末などは、けっして対局に賭けられた財産の質や量にはよらなかった。そのため、今日のわれわれは、数々の人間のドラマを知ると同時に、昔の人々は、かつてどのような視線を対局に注ぎ、どのような夢を抱き、如何なる奇跡を喜んだかを感じ、時代の移り変わりを映し出すものに出会うのである。

過ぎ去った一局の賭博のなかには、時代の文化を盛り込んだものがあつた。

## 六 見立ての果て

### 出産と双六

賭博としての双六、そして賭博が覗かせた時代の文化を記してきた。しかしながら、双六は単なる賭博の道具として用いられただけではなかった。一つの博打あるいは遊戯だという常識的な観測ではけっして予想できないところに、もう一つの双六の活躍の歴史があった。

西園寺公衡（一二六四―一三一五）は「昭訓門院御産愚記」と題する記録を残している。ここに公衡は龜山上皇に仕えた妹瑛子（昭訓門院）が皇子を出産した詳細な経過を記録した。出産のあったのは、乾元二年（一三〇三年）のことである。記憶にあったように、鎌倉幕府が普通の人々の双六博奕には、指を切るという刑罰に処すると公告したのはちょうどこの年であった。しかしながら、都にはまったく別の世界があった。同じ年の五月九日、待ちに待った出産の知らせを受けて、早朝に参内した公衡の目には、双六を対局する人間たちの姿があった。

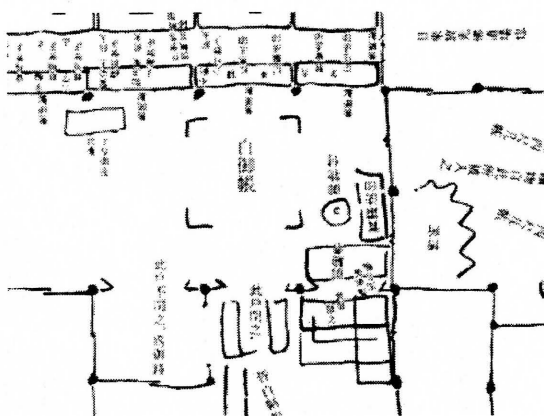
公衡の当日の日記には、このような記録が残った。

御驗者の参上の時、即ち御物を付け（生衣、重唐衣、赤袴）、打ち博す（弟子一人、白衣、赤袴、同じく相具す。替り々々に打ち博す）。

西の障子の外、北方に廻り屏風（唐紙）を立て、蓆を敷き、双六局を置き、博所と為す。

「博所」と呼ばれる場所は、筆者が丁寧に書き残した略図から明らかなように、母屋の真ん中に設けられて産屋のすぐそばだった（絵十）。おなじ指図を眺めれば、「不動」「如法愛」「愛染王」などの仏壇仏像も、そして「公什僧正」「了遍僧正」「禅助僧正」といった恐らく当時名前の知られていた名僧たちの席も悉く庇に置かれ、「公卿座」といったもの（絵十には見えない）はさらに建物の外に押し出されたなか、「博所」だけは母屋の中に大事に設けられた。そこに、「御驗者」と呼ばれる人は正装して登場し、その弟子たちを連れて双六を対局するのである。かれらのために、由緒正しい唐

絵十 昭訓門院出産の位置関係図（部分）



紙の屏風を用いて密室が作られ、筵が敷き詰められて、双六の盤が置かれる。並々成らぬ待遇から、御験者たちの神通力への深い信心が伝わる。

規模こそ違うが、出産の場における双六対局の様子を想像させてくれる画像資料も知られている。絵巻『餓鬼草紙』の「伺嬰兒便餓鬼」段に、産婦のまわりをうろつく餓鬼の姿が描かれた。そこに、産婦の出産が行われる部屋のすぐとなり、巫女の服装をした女性が伺候し、そして双六の盤が丁寧に描き添えられている（絵十一）。この双六の盤もまた巫女の祈祷や加持のための、重要な道具に違いなかった。

出産と双六との関連についての信仰のありかたは、ほとんど伝わらない。そこに一体どのような対局が行われ、いかなる予言あるいは祈りが期待され、どのような形でその結果を伝えたのだろうか。双六の対局により、人々は人間には



絵十一 出産の場に置かれた双六の盤  
〔餓鬼草紙〕より



図り知れない神の意図を伺い知ったのではないかとの推論がされている（網野善彦『職人歌合』）。あまり詳しい資料に恵まれない現在、満足した答えは得られにくい。

ただ、出産する場に設けられた対局、そしてそのような状況に描かれた双六の盤は、一つのたしかなメッセージをわれわれに伝えている。ここでは、双六もはや賭博の道具ではなかった。双六の対局という行為、ひいては双六の道具そのものにおいて、人々はかつてまったく異なることを見出し、それを思い描いていたに違いなかった。

### 双六を宇宙に見立てる

これからは、出産という状況との具体的な関連から離れて、中世の人々が見出した双六の象徴的な世界を眺めて見る。

中世の百科事典である『堪囊抄』は、「双六局を作る寸法の事」と題して、双六盤の魅力的な解説を伝えた。

局、四季表して厚四寸、八方に表して、広八寸、十二月に当て長さ一尺二寸にして、竪に十二目盛り、天地人の三才に像りて、横に三段を分ち、陰陽の

二儀に擬へて、内外の二陣を成し、一月を司とりて、黑白卅の石あり、日月に擬して二の骰あり、須弥の三十三天に表し、筒の竹を三寸三分に切る。是日月の行度を隠す故也。

これはまるで機知に富んだ数字遊びである。述べられている内容を簡単なチャートに纏めなおすと、およそつぎのような対応関係が見える。

局： 四季——厚さは四寸

八方——広さは八寸

十二月——長さは一尺二寸、竪は十二目

天地人の三才——横に三段

陰陽の二儀——内外の二陣

石： 一か月——黑白卅の石

賽： 日、月——二の骰

筒： 須弥の三十三——筒は三寸三分（日月を隠す）

さらに、右の記述ほど精密で体系的なものではないが、鎌倉中、後期に明空によって作られ、東北の武士たちに愛唱された早歌にも、明らかに似た考えが唄いあげられた。

是を陰陽に掌。盤の面をきぎみては。此十二廻に象。かるが故に則其名を双六とよぶとかや。三十石を並ては。黑白月の一廻。十五の石を分立。賽に又十二の目を定。十二時に拵して行度有。筒の中をば夜とし。外に出ては昼とす。『宴曲抄』

ここにある記述は、一組の道具から、読み取れるほとんどあらゆる数字を集めて、それを天地自然の法則に見立ててしまう。十二の時間あるいは月の数から始まり、「四季」「八方」「三才」「二儀」と、双六に見出す世界は止まるところを知らずに膨れあがり、はては「須弥天」をもって「日月」を隠すくだりになると、その発想の膨大かつ奇妙なことに、感動させられるぐらいだった。手を伸ばせば届く道具に、宇宙そのものがまるごと持ち込まれた。双六の天地は、そのまま人間が住む世界と重なり、そして人間の感覚の外にあって、認識としてしか存在しない宇宙観を具現するものとなった。

### 吉備大臣の筒と賽

双六の見立ては果たしてどこをその終着点とするのだろうか。言い換えれば、限られる対象から限らない想像の世界を描き出そうとする旺盛で抽象的な働きは、

いったいどのような新しい認識や精神的な実り物を人々に提供するものだろうか。今日の読者として上記の見立ての記述を読むと、ついこのような質問をしたくなる。

これに答えるためには、つぎの説話は格好の手がかりを提供してくれる。

これは、大江匡房が伝えた吉備大臣の逸話である。遠く唐に渡った吉備大臣は、そこで中国の皇帝やその群臣によって設けられた数えきれない難問に直面した。唐に客死した遣唐使の鬼の助力により、かれは難問を一つひとつと解いてしまう。これら一連の展開ははやく絵巻となり、それぞれのプロットはリアルでかつユーモラスに描かれている。残念ながら現存する『吉備大臣入唐絵巻』が伝えるのは、文選読みと囲碁の対局の二話までである（絵十二）。吉備大臣はその後さらに野馬台詩の読解まで成し遂げたところで、唐の皇帝もついにさらなる問題を思いつかず、ただ吉備大臣を帰国させないという至上の命令を言い渡した。

吉備、「尤も悲しき事なり。もしこの上に百年を歴たる双六の筒・賽盤侍らば、申し請けんと欲ふ」と云ふに、鬼云はく、「在り」と云ひて求め与へしむ。また筒棗、盤楓なり。塞を枰の上に置きて筒を覆ふに、唐土の日月封ぜられて、二、三日ばかり現れずして、上は帝王より下は諸人に至るまで、唐土大いに

驚き騒ぎ、叫喚ぶこと隙なく天地を動かす。  
占はしむるに、術道の者封じ隠さしむる由  
推る。方角を指すに、吉備の居住する楼に  
当る。吉備に問はるるに、答へて云はく、  
「我は知らず。もし我を強冤陵せらるるに  
よりて、一日、日本の仏神に祈念するに、  
自ら感應有るか。我を本朝に還させらるべ  
くは、日月何ぞ現れざらんや」と云ぶに、  
「帰朝せしむべきなり。早く開くべし」と  
云へり。よりて筒を取れば、日月ともに現  
はる。ために吉備すなわち帰へらるるなり」  
と云々。『江談抄』卷三「吉備入唐の間の  
事」

崖っ縁に立たされた吉備大臣は、最後の手段  
と言って双六の盤、筒と賽を頼む。そして軽々  
と賽を蔽うことによって、中国の日と月を隠し



絵十二  
吉備大臣の囲碁対局（吉備大臣入  
唐絵詞）より

てしまう。すべての人間の叫び喚く声は耳に聞こえてきそうな気がする。唐の一番の術道に通暁する人が現れてきて、その人の本領をもってしても、吉備のいる方位を突き止めることが精一杯で、これを解決するような腕は持たない。そこで吉備は問いただされる。したたかなかれは、日本の神仏に助けてもらおうようにしてあげると称して帰国の許しをもらい、再び筒を持ち上げることにより日と月を外に出してしまう。なんという雄大なドラマだったろうか。

この話を語り伝えた人々には、双六に宇宙を見出すことに、中国の伝統を乗越えたという想像の喜びと自負が感じられていたのだろう。それだからこそ、ここにある双六の筒と賽は唐の権威と闘う日本の武器であり、インド、中国伝来の遊戯は、その母体となる文化に立ち向かうものと成り得た。見立ての果てに、双六は日本の文脈において大きく成長したのである。

## 遊戯の見立て

一つの遊戯は、遊びの手段として、まずは単純明快でなければならない。プレイヤーはそれぞれの能力を振るい出し、短い時間のなかで夢中になり、そしてはっきりした勝負を形にする。これと同時に、長く伝わり、広く愛着される遊戯は、

さらにプレーヤーの想像力を刺激し、限りある夢中の時間において、限らない想像的な空間に羽ばたかせるものである。言い換えれば、簡単に手にするのできないなにかを、いかにして象徴的な手法によって模擬的に体験させるかは、一つの遊戯の成功如何の先決条件だとさえ言える。

このような目で見れば、双六にみる世界、そして宇宙への雄大な見立ては、まさに巧妙な演出なのである。今日の目から見れば、そこに述べられている関連と発想は、あまりにも抽象的で、それ自体が一つの幼稚な遊びとして映ってしまうことはなくもない。しかしながら、見立てとは、最初から機智に富んだ発想をもって見せ場を作り出すものだった。結果的に理屈っぽいものを並べたてる説明の無力さは、これを知らない、体験することのない人々へ伝えようとして、一種の精神的な活動を言葉に直したがための結果だったろう。一つの遊戯としての見立ては、その性格からにして、これに熱中する経験を持つ人々にだけ共有するもので、そのような経験を持たない人間を拒絶するものだった。

同じ目で眺めていけば、つぎのことまた自明なことになってくる。歴史の移り変わるなか、表現手段の進歩は、やがて双六のような遊戯の消滅につながる決定的な理由の一つだったのかもしれない。

一方では、出産する場に現われた双六を対局する「験者」たちの姿と、職人として描かれたほとんど裸の姿になってしまった男たちとは、想像のなかで重なっていく。出産という特別な状況において、おもむろにりっぱな服装によって身を固め、双六の盤や筒を携えたかれらは尊敬の眼で迎えられたのではなからうか。双六は、普通の物理的な意味では、あくまでも生産的な行為ではない。だが、以上のような見立てのありかたをさぐることにより、われわれには、依然、漠然としてではあるが、社会が職人というグループの人間へ向けた期待のようなものが見えてきたような気がする。双六は単に物質的に優雅な生活を象徴するに止まらず、これに打ち込むことは、かつては、いたって精神的な営みともなり得たのである。

## 七 鬼は顔を見せる

### 長谷雄の対局を読み直す

平安や中世という時と場における双六をいくつかの側面から眺めてきた。ここ



で試みた観察は、互いに独立していながらも、相互に交差し、それらの照射のもとに、古く行われ、いまとなつては消えてしまった双六が、その立体的な姿をすこしずつ見せてくれた。そのおかげで、われわれには絵巻『長谷雄草紙』において表現されたストーリーの世界がもっと理解できるようになり、隠された論理やメッセージを読み取れるようになった。

双六はかつて一種の芸能であり、双六の練達な人はすなわち芸の達人だった。これを仕事とする人間のグループさえ存在していた。長谷雄の邸宅まで訪れてきて、対局を挑む男の振る舞いには、まさにそのような人格の力を思わせた。かれの体から発散するプロの雰囲気と、人に迫る挑発のパワーは、なによりも長谷雄を刺激したのだろう。そしてそれが鬼気に溢れるものに変質した瞬間でも、長谷雄をたじろがせることが出来なかった。

双六は舶来したものである。双六の対局に打ち込むことは、そのまま大陸文化の模擬体験であり、一つの文化的な行為である。したがって、双六男の挑戦に対して、これに迷わずに応戦したことは、とりもなおさず長谷雄の洗練された貴族的な自己表現であり、一芸のプロに対する文化人としてのプライドと優位の主張である。かれは百の芸をこなせる達人だと喧伝された。そのような伝説的なイメー

ジを作り上げ、それを支えたものは、突き詰めて言えば、このような文化的で貴族的な姿勢に由来するものである。

双六は禁止されていた。とにかく賭博を伴うものは、いつの時代を問わず厳しい取り締まりにあい、政府だけではなく、さまざまな理由により周囲は目を光らせていた。朱雀門の上という空間は、まずこのような実用的な理屈から選ばれたのだろう。それはまず現実的な意味において、要らない好奇の目を離れ、つきまとうかもしれない懲罰から逃れ、日常的な意味においてこの世との関連を遮断することを意味する。そしてこのような非日常的な密室は、やがて象徴的な意味においてのこの世との断絶を示し、ストーリーにもう一つの異なる次元をもたらす。

双六に人々はあらゆる財産を賭けた。財産所有者の入れ替えは、ほかでもなく対局の勝負を表現する終極的な方法である。そこで長谷雄と男との間には、すべての財産と一人の美女とが賭けられる。世間に考えられている賭けものの内容上のバランスというよりも、ここに伝わってくるのは、勝負に勝つためのあい讓らない執念であり、互いに競い合う自信だったろう。

双六は、さらに人間の想像する世界を描き出す象徴的な存在になっていく。限られた対象から、人々は雄大なものを見出してしまふ。これに熱中する間に、鬼

という違う世界からやってくるような生き物が現れてきても、そうはありえないことでもなからう。そして人々はつぎのことを確信する、もしここにも筒をもって日と月とを蔽い隠すような天地を動かす大事件が起こってくるならば、吉備大臣のときと同じような、そのような能力を持ち合わせるのは、鬼ではなく長谷雄だったに違いない。

『長谷雄草紙』という作品において、朱雀門のうえでの対局は、明らかに物語展開の一番の山場になる。そしてそれを成立させるために、双六はすべての条件を整えた。対局の間に、鬼は初めてその顔をみせる。そして絵巻は明らかな描き方をもってストーリーの構想を表現しきる。ここに鬼が登場してくる経路は完璧に作り上げられている。双六は、ほかでもなく鬼をこの世にその姿を現わせる巧妙な装置だった。

長谷雄との対局に、鬼はしかしあっさりと負けてしまった。過去数々の語り種になった対局の勝負からは、さまざまな人間のドラマが生まれた。長谷雄と鬼とのこの一局には、果たしてどのような続きが待っているのだろうか。鬼はいったいその約束を守るのだろうか。それを長谷雄はどのような構えで受け入れ、いかなる振る舞いをもって対応していくのだろうか。賭けられたもの以上に、二人は

どのようなものを勝ち、どのようなものを失っていかうとしているのだろうか。  
ストーリーの展開には目を離せない。

### 絵巻は語りつづける

ここに、一枚の小さい絵を対象として、その裏に隠された意味合いや過ぎさつた鑑賞者たちの視線を求めるべく、かなりの紙数を費やしてきた。絵巻の表現は、限られた空間において行われている。絵巻の作製は、なによりも同時代の、しかもごく限られた人間を読者グループだと想定していた。したがって、一枚の絵の内容を十分に理解するためには、今日の読者、鑑賞者としてのわれわれとして、まず周辺の情報を根気よく集め、それらを再構成することから始めなければならぬ。

ここで頼りにできるのは、過去の時代から伝わる文字の文献であり、絵の遺品の数々である。文字と絵という異なる表現の形態の間を行き来しつつ、われわれの前に、平安・中世の常識、非常識がその神秘的なベールを剥がしてくれる。時代や文化の距離を乗り越えて、作品に描かれた人間の精神世界を体験し、その背後にあった豊かな世界を理解し、再現することに、絵巻は誘ってくれる。

絵巻は、われわれに歴史と文化を語っている。時代を潜り抜けて伝わった古典を読み取るのは、今日の読者の義務であり、その読解の如何は、現代人の知識と感性にかかる。

絵巻を読み解く旅はなお続く。

### 参考文献：

- ・『新猿楽記』（東洋文庫）、藤原明衡著、川口久雄訳注、平凡社、一九八三年。
- ・「職人歌合絵の世界」、『古美術』七四、三彩新社、一九八五年。
- ・『宋・元・明通俗小説選』（中国古典文学大系）、松枝茂夫ほか訳、平凡社、一九七〇年。
- ・『Chinese figure painting』, Thomas Lawton, Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, 一九七三年。
- ・『律令』（日本思想大系）、井上光貞ほか校注、岩波書店、一九七六年。
- ・『平安遺文』、竹内理三編、東京堂出版、一九七四年。
- ・『訓読明月記』、藤原定家著、今川文雄訳、河出書房新社、一九七七年。
- ・『鎌倉幕府法』（中世法制史料集）、佐藤進一、池内義資編、岩波書店、一九七八年。
- ・『校注水鏡』（新典社校注叢書）、金子大麓ほか編、新典社、一九九一年。

- ・『墮囊鈔』（日本古典全集）、行譽著、正宗敦夫校訂、日本古典全集刊行会、一九三六年。
- ・『古事類苑』（法律部、遊戯部）神宮司庁編、吉川弘文館、一九八一年（神宮司庁蔵版の複製）。
- ・『中世の罪と罰』、網野善彦ほか著、東京大学出版会、一九八三年。
- ・『すごろく』（ものと人間の文化史）、増川宏一著、法政大学出版局、一九九五年。
- ・『日本絵巻大成』、『続日本絵巻大成』、『続々日本絵巻大成』、小松茂美編、中央公論社、一九七七年。

\*\*\*発表を終えて\*\*\*

いまから十年前、大学院生のころ「日文研フォーラム」を何回も聴講していた。一人の留学生として、外国人による日本研究という珍しい場から、たくさんの有意義な刺激を受けたことはいまでも覚えている。年月は流れ、いまは自分が講壇に立つことになった。拙い発表で、先学には追いつかず、わざわざ時間をさいて会場へお越しになった方々には果たしてなにかと参考になるような話ができたかどうか、甚だ覚束ない思いでいる。

短い一席の話だったが、沢山の方々にいろいろな形でお世話になった。まずはコメンテーターを快く引き受けてくださった小松和彦先生、貴重なアドバイスをしていただいた光田和伸先生にお礼を申し上げたい。さらに発表に用いた唐の絵の存在を教えていただいた寺本タダオさん、山中理さん（白鶴美術館）、当日会場へ足を運ばれた井上章一先生、稲賀繁美先生、劉建輝さん、フォーラムを巨細となくきり回した篠原初江さん、慣れない機材を運び込んだ福垣重樹さんはじめ、多くの方々に感謝しなければならない。稲賀先生の呼びかけで集まり、上垣外憲一先生まで駆けつけた三条の飲み屋での忘年会、そして李応寿さん、金貞禮さん、梁嶸さんとの二次会代わりの洛西散策など、楽しい思い出が尽きない。

日文研での生活は、自分のなかにあるカナダと日本との距離を限りなく縮めた。これを新たな出発点として、これからも怠ることなく日本研究に取り組みたい。

楊 曉捷

一九九九年クリスマスを迎えて







日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊びー拳を中心にー」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像ー現実と幻想ー」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性ー恵信尼の書簡ー」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋ー都市社会の自由とその限界ー」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性ー猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りにー」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係 の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考ー『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 ー米国の日本美術コレクションの一例としてー」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践ー有島武郎の場合ー」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 ー旧身分文化との関連を中心としてー」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 ー科举制度をめぐるー」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語りー平安朝文学の特質ー」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880~1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」



67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Franeois MACE 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧⑩	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュージナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨⑤	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
⑨⑥	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨⑦	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学ー近代からの再生ー」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何かー21世紀に向かって」
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人ー外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼までー狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員 教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩04	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩08	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか — 詩的イメージとしての典故 —」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日 文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪⑪	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 『『愛玩』－安岡章太郎の『戦後』のはじまり』
⑪⑫	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 『『道行き』と日本文化－芸能を中心に』
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Grenn HOOK 『地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割』
⑪⑭	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 『『中』のシンボリズムについて－宇宙論からのアプローチ』
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 『日本の民主主義－沖縄からの挑戦』
⑪⑯	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 『うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化?』
⑪⑰	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 『石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について』

118	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
(120)	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサ ルタント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴 力」
(121)	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン ノエル ロベール (フランス パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文-死語の将来-」
123	11.11.16 (1999)	ヴラディスラフ ニカノロヴィッチ グレグリヤード (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブル ク支部極東部長・日文研客員教授) Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
(124)	11.12.14 (1999)	楊 曉捷 (カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) X. Jie YANG 「鬼のいる光景-絵巻『長谷雄草紙』を読む-」



○は報告書既刊

なお、報告書はホームページのデータベースで見ることが出来ます。

\*\*\*\*\*

発行日 2000年3月31日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048

ホームページ: <http://www.nichibun.ac.jp/>

問合先 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

© 2000 国際日本文化研究センター



■ 日時

1999年12月14日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

第三回

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景

鬼のいる光景